

株式会社ヤマザキ 2019年3月期
決算説明資料

2019年6月

6147

YAMAZAKI CO., LTD

目次

- (1) 株式会社ヤマザキとは 3
- (2) 2019年3月期の業績・財務情報 7
- (3) 市場動向・業績予想・戦略 18
- (4) 社会的課題に挑む多角化事業 23

(1) 株式会社ヤマザキとは

創業・創立

創業 1946年3月1日

創立 1960年9月1日

沿革

- 1946年 山崎好夫が浜松市寺島町に山崎鉄工所として創業、楽器部品及び専用機・治工具の製造を開始
- 1954年 浜松市浅田町に移転しオートバイ部品の受注を開始
- 1960年 法人組織に改組し株式会社山崎鉄工所を設立
- 1964年 浜松市有玉北町(現在地)に移転し事業拡大を図る
- 1968年 ドリルユニットをはじめとする省力化機器の製造販売を開始
- 1972年 商号を株式会社ヤマザキに変更
- 1987年 第13回発明大賞功労賞を受賞
- 1990年 設立30周年。資本金9億5,840万円に増資し株式の店頭登録 (現JASDAQ,証券コード番号6147)
- 1991年 本社新社屋完成
- 1992年 都田テクノポリス内にテクニカルセンター完成
- 2000年 ホーニング部門を新設
- 2003年 浜名湖浄化技術発掘事業に参加
- 2004年 ベトナムに現地法人YAMAZAKI TECHNICAL VIETNAM CO.,LTD.を設立
- 2004年 ジャスダックに上場

事業内容

- ◆省力関連機器製造販売 (FMSユニット・インデックステーブル・スピンドルユニット・多軸ヘッド・タレットヘッド・ドリルユニット・タップユニット・その他)
- ◆専用工作機械、マシニング、ホーニングマシンの製造販売
- ◆電子機器の製造販売
- ◆オートバイ部品の製造

主要取引先

愛知機械工業株式会社／株式会社アツミテック／いすゞ自動車株式会社／カワダ株式会社／
京浜精密工業株式会社／上海日立電器有限公司／自動車鋳物株式会社／スズキ株式会社／
ダイハツ工業株式会社／株式会社椿本チェーン／株式会社デンソー／GKNドライブインテクノロジー株式会社／
トヨタ自動車株式会社／日産自動車株式会社／浜松ホトニクス株式会社／
パナソニックファクトリーソリューションズ株式会社／日野自動車工業株式会社／PTAstraHondaMotor／
富士重工業株式会社／本田技研工業株式会社／本田金属技術株式会社／マツダ株式会社／株式会社ミクニ／
三菱自動車工業株式会社／三菱重工業株式会社／株式会社山田製作所／ヤマハ株式会社／
ヤマハ発動機株式会社／UDトラックス株式会社

経営方針

◆常に製造業の新たな動向に対応する戦略を遂行し、生産システムを改革

- ①川上である製品開発の強化
- ②川下である在庫管理の強化
- ③生産設備を業態や製品特徴に合わせて最適化

◆最優先事項は、「お客様の生産設備の最適化」

- ・異なる選択要素をうまく組み合わせ、目的達成のために最も適切な設備を構築
- ・マスプロダクトによる効率化と多品種少量生産による高付加価値化という2つの相反する選択要素について、前者には自動化・省人化を高度に追求したシステムを、後者には個別ニーズに細かく対応できるフレキシブルなシステムで対応
- ・マスプロダクトによる効率化に貢献する専用工作機械に加えて、個別ニーズに細かく対応できる汎用性の高いユニットを常に500種類以上整備し、顧客企業に「生産設備の最適化」を積極的に提案



(2) 2019年3月期の 業績・財務状況

決算概要

	2018年3月期	2019年3月期					
	通期	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期	通期	前期比増減
(百万円)							
売上高	3,065	599	759	716	1,298	3,372	110%
営業利益	89	2	12	74	209	297	233%
経常利益	73	-19	24	77	202	284	286%
親会社株主に帰属する純利益	46	-24	23	70	149	218	218%
配当(¥)	¥5					¥5	

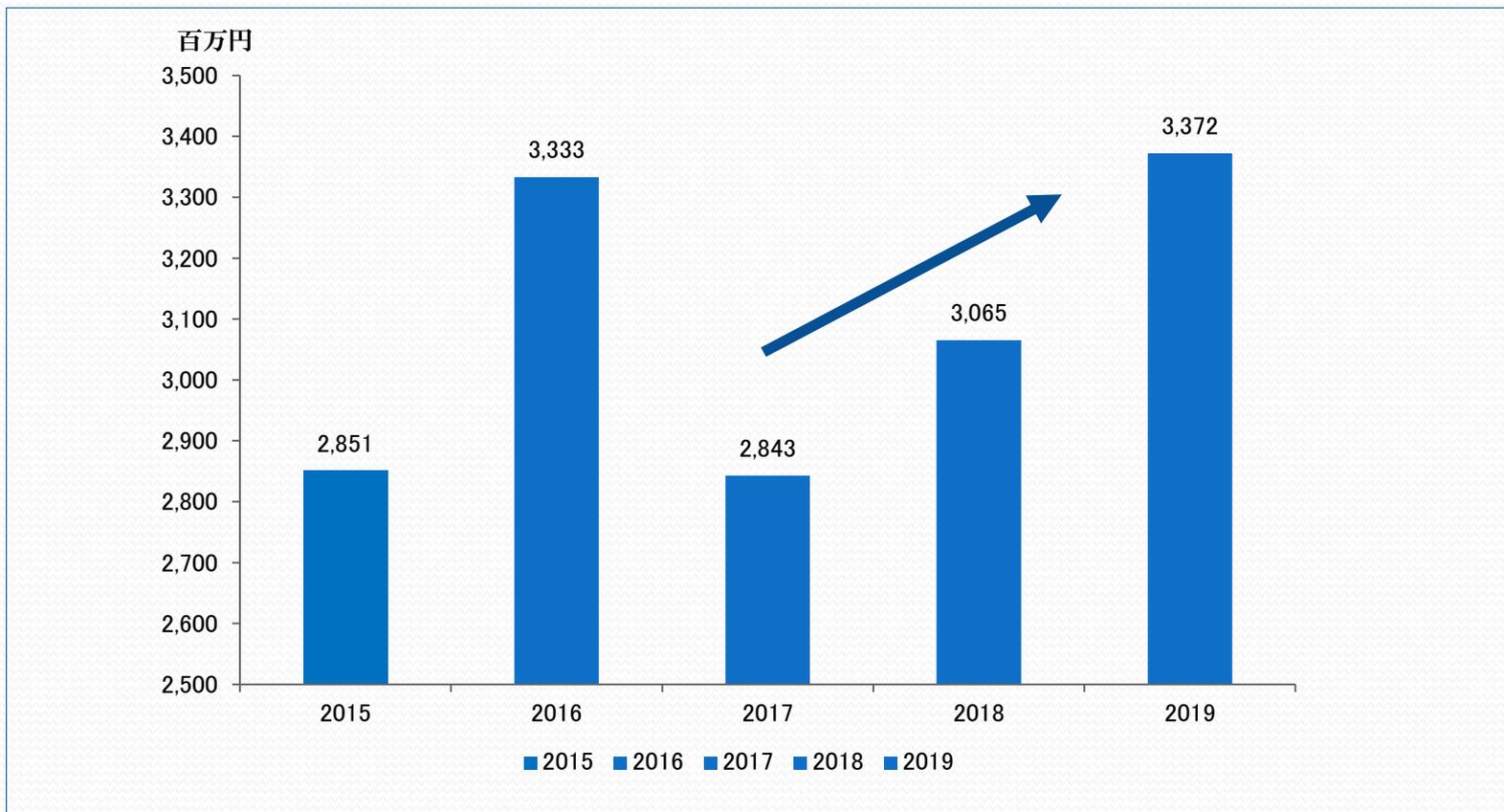
- ◆売上高は、自動車等の経営環境の好調を背景に提案型営業を展開した工作機械事業の好調を主因に、前期比110%を達成
- ◆また原価率の低減(2018年 78%⇒2019年 72%)努力などにより、利益も大幅に増加
- ◆この結果、2018年に復配した1株当たり配当金は、2019年3月期も¥5.00を継続

収益の推移

(百万円)	2014年 3月期	2015年3月期	2016年3月期	2017年3月期	2018年3月期	2019年3月期
売上高	3,020	2,851	3,333	2,843	3,065	3,372
営業利益	214	42	198	81	89	297
営業利益率	7.1%	1.5%	5.9%	2.8%	2.9%	8.8%
経常利益	243	108	134	37	73	284
親会社株主に 帰属する 純利益	247	93	84	23	46	218

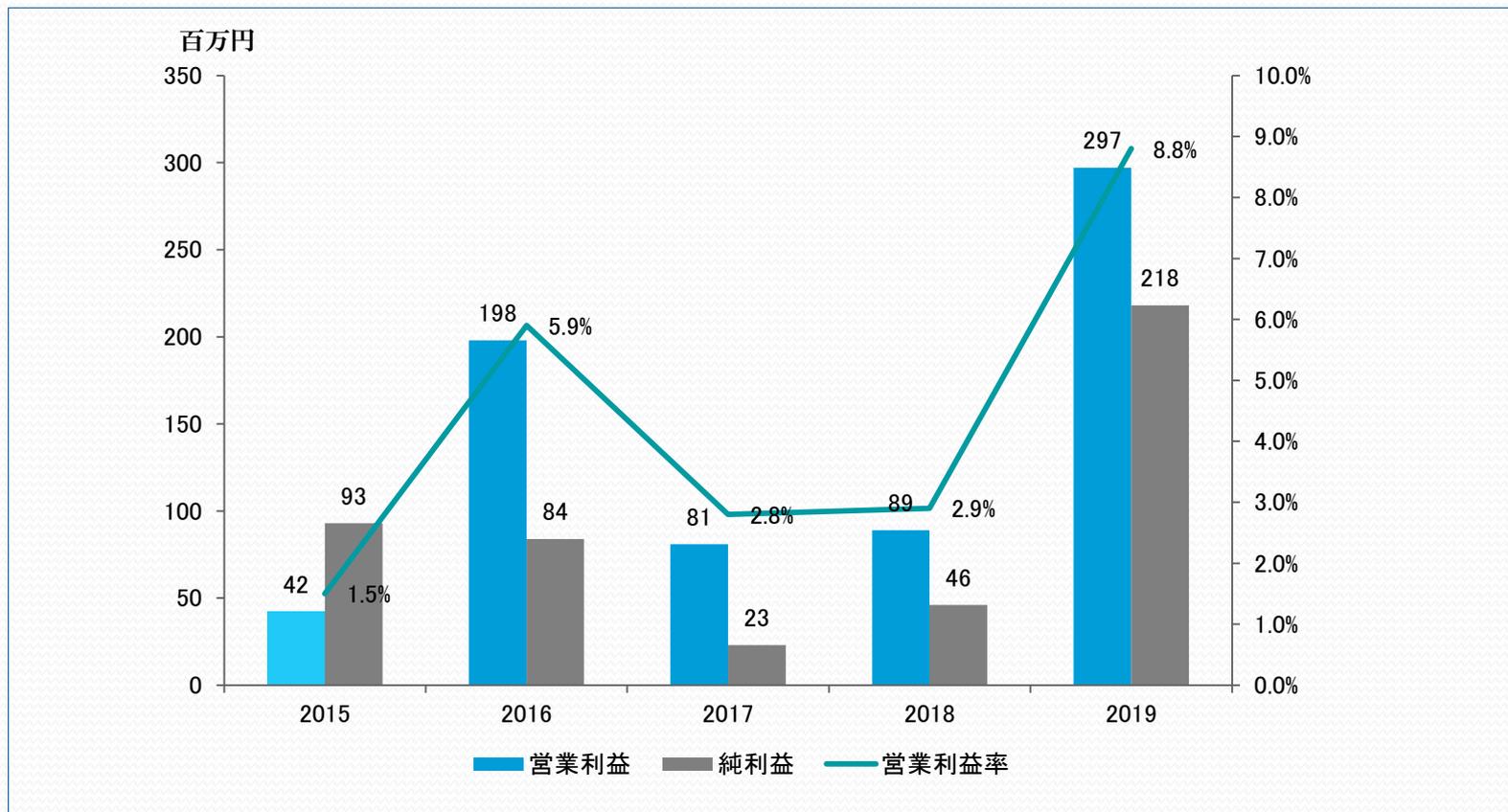
- ◆ 工作機械の設備投資への慎重感から2015年3月期に低下した業績は、省力化機器など工作機械事業における提案型営業が結実し、増加基調を継続
- ◆ 原価低減など業務効率化も進んでおり、営業利益の拡大と利益率改善が進捗

売上高の推移



2017年以降、専用工作機械の販売が増加したため、売上高は増加傾向

収益の推移



生産性向上、原価低減努力(原価率:2015年 80%⇒2019年 72%)など、業務効率化により、営業利益率も拡大傾向

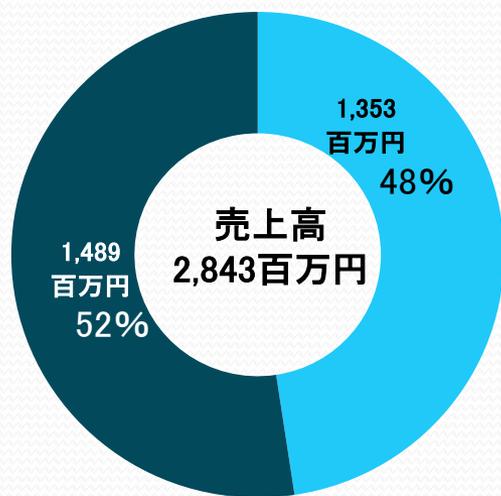
セグメント別業績推移

	(百万円・%)	2015年3月期	2016年3月期	2017年3月期	2018年3月期	2019年3月期
工作機械事業	売上高	1,694	2,003	1,489	1,756	2,174
	セグメント利益	12	157	0.2	18	240
	セグメント利益率	0.7%	7.8%	—	1.0%	11.0%
自動二輪車等 部品事業	売上高	1,157	1,330	1,353	1,308	1,198
	セグメント利益	14	25	64	55	42
	セグメント利益率	1.2%	1.8%	4.7%	4.2%	3.5%

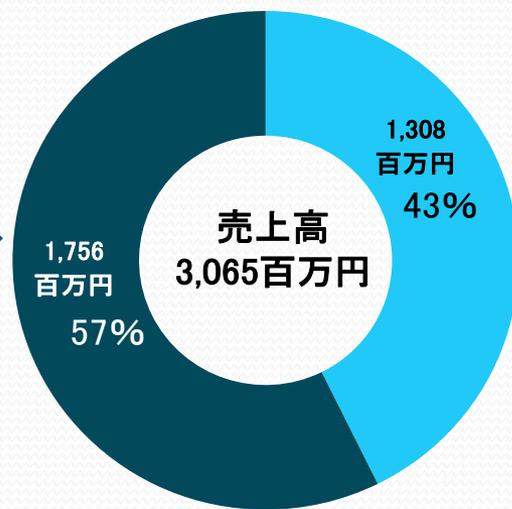
2019年3月期は、自動二輪車等部品事業のベトナムの子会社を含めた売上が減少した一方で、工作機械事業は省力化機器、専用工作機械ともに販売が増加したため利益の拡大とともに、利益率も大幅改善

セグメント別売上高の変化

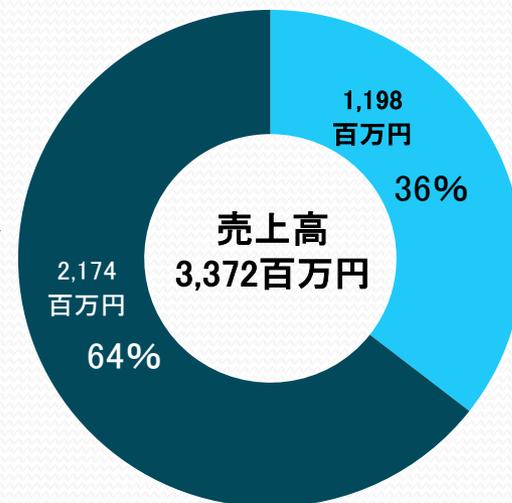
2017年3月期



2018年3月期



2019年3月期



■ 工作機械事業 ■ 自動二輪車等部品事業

社会的要請とお客様のニーズに対応する、省力化機器・専用工作機械等、工作機械事業の売上が増加し、売上高におけるシェアも拡大～事業構造が変化

地域別別売上高推移

(百万円・%)	2015年3月期	2016年3月期	2017年3月期	2018年3月期	2019年3月期
日本	1,711	2,331	1,971	2,555	2,465
日本 売上高シェア	60.0%	69.9%	69.3%	83.3%	73.1%
アジア	960	825	761	398	849
アジア 売上高シェア	33.7%	24.7%	26.8%	13.0%	25.2%
その他	180	176	110	111	57
その他 売上高シェア	6.3%	5.3%	3.9%	3.6%	1.7%

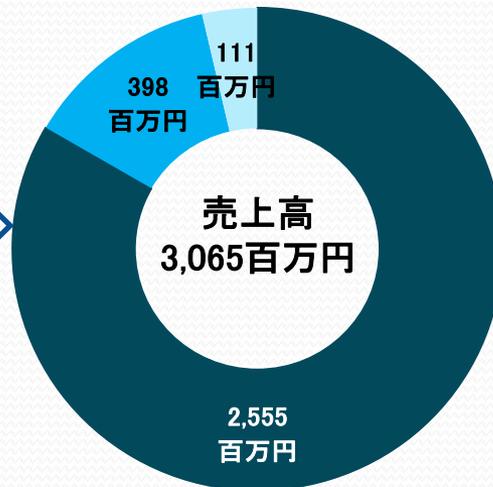
2019年3月期は、日本の売上高が微減の一方、中国以外のアジア諸国の工作機械需要の増加を背景に、アジア地域が大幅に拡大

地域別売上高の変化

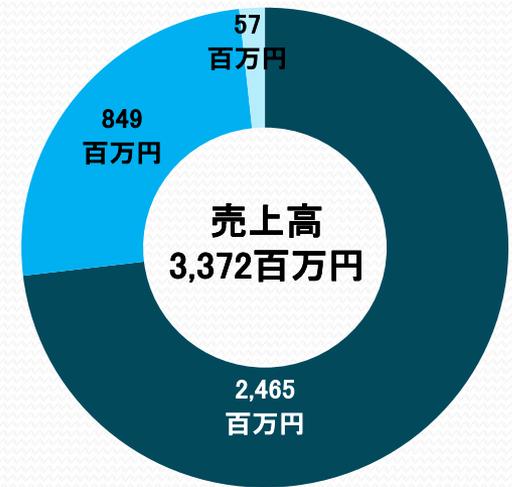
2017年3月期



2018年3月期



2019年3月期



■ 日本 ■ アジア ■ その他

日本の売上高は安定的に推移しているが、中国以外のアジア諸国の工作機械需要の増加を売上に結実させ、アジア売上高が増加し、売上貢献度も拡大傾向

バランスシート及び指標

(百万円・%・倍)

2018年3月		2019年3月	
流動資産 2,729	流動負債 1,833	流動資産 3,299	流動負債 2,431
固定資産 1,871	固定負債 768	固定資産 1,799	固定負債 543
	株主資本 1,889		株主資本 2,096
	その他純資産 109		その他純資産 28
資産合計 4,601	負債純資産合計 4,601	資産合計 5,099	負債純資産合計 5,099

2018年3月		2019年3月	
流動比率	148%		135%
ROE	2.4%		10.6%
ROA	1.0%		4.5%
自己資本比率	43.4%		41.6%

財務健全性を維持しており、2019年3月は業績の好調を背景に、効率性も改善

バランスシート構造の変化

2018年3月



2019年3月期

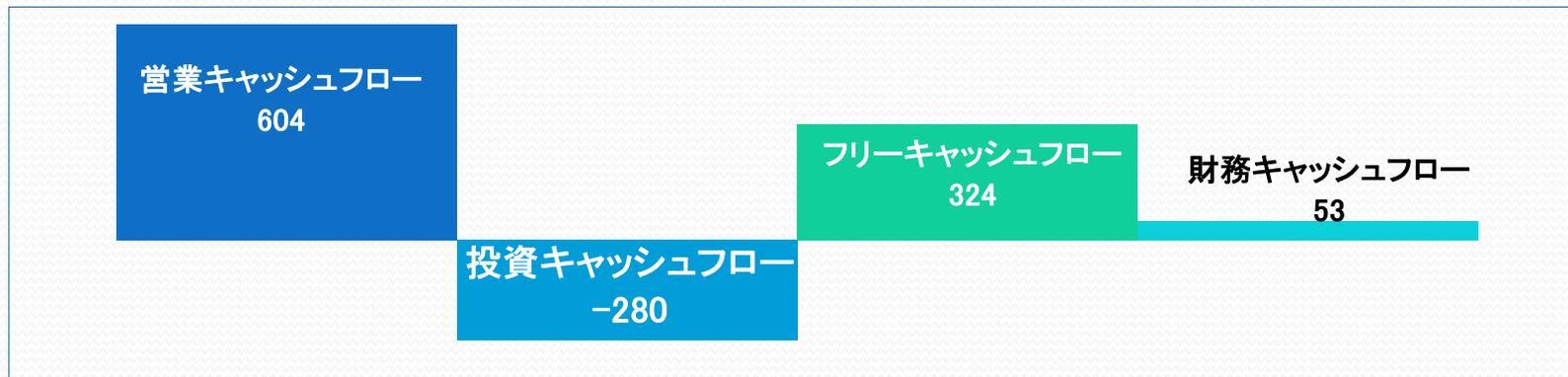


2019年3月は、業績の好調を背景に株主資本が増加するとともに、ROEも改善

キャッシュフローの状況

(百万円・%・倍)	2018年3月期	2019年3月期
営業活動によるキャッシュフロー	25	604
投資活動によるキャッシュフロー	-96	-280
財務活動によるキャッシュフロー	149	53
フリーキャッシュフロー	-71	324
現金及び現金同等物の期首残高	99	176
現金及び現金同等物の期末残高	176	553

2019年3月期



2019年3月期は、業績の好調を背景に営業キャッシュフローが増加し、フリーキャッシュフローが黒字化

(3) 市場動向・業績予想・戦略

工作機械市場受注額予想

(億円/%)	2015	2016	2017	2018	2019(予想)	2020(予想) 2021(予想)
内需	5,793	5,316	6,880	7,622	-7.0~-6.0%	+4.0~5.0% +5.0~6.0%
外需	8,197	7,577	10,924	10,036	-5.0~-4.0%	+0.5~1.5% +3.5~4.5%
受注計	13,990	12,893	17,803	17,658	-8.0~-7.0%	+7.0~8.0% +5.5~6.5%

(日本産業機械工業会「産業機械受注統計」をもとに三菱UFJ 銀行戦略調査部が2019年2月に作成した資料より)

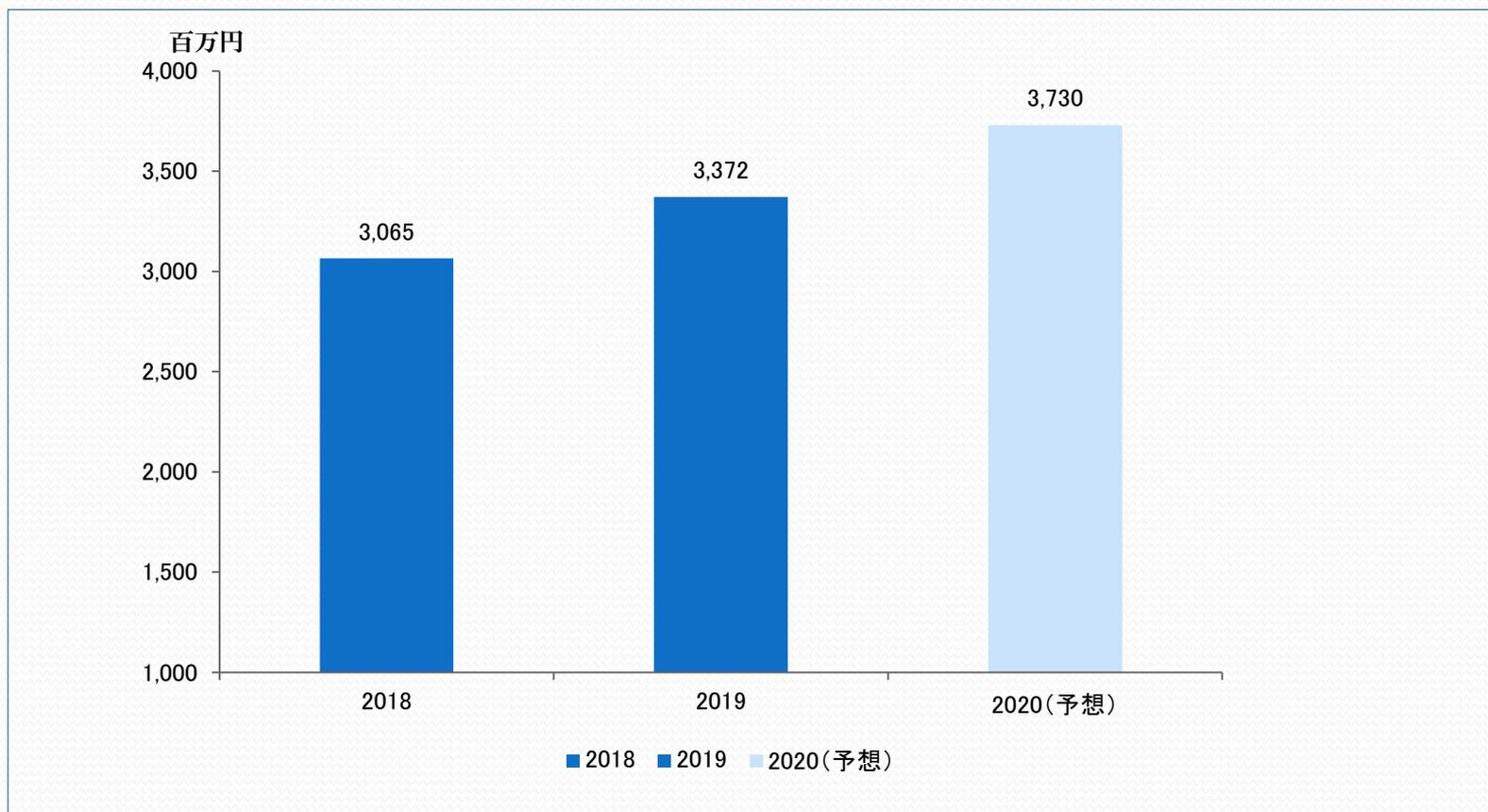
- ◆工作機械工業会の2019年4月の統計では、工作機械の需要は国内外ともに減少傾向にあり、今後は、米中貿易摩擦を背景としてスマートフォンや自動車向けの需要への影響が懸念されている
- ◆ただし、2019年は外需に加え内需もマイナス成長に転じるため前年割れとなるものの、2020年以降は上昇トレンドに転じる見込み
- ◆また2020年には第4次産業革命、5G本格投資、自動運転・EV化、IoT時代到来で、工作機械は大幅増との見解もある

2020年3月期の業績予想①

(百万円)	2018年3月期(実績)	2019年3月期(実績)	2020年3月期(予想)	前期比増減
売上高	3,065	3,372	3,730	110%
営業利益	89	297	300	101%
営業利益率	2.9%	8.8%	8.0%	-0.8% ポイント
経常利益	73	284	257	90.4%
親会社株主に帰属 する純利益	46	218	210	96.3%

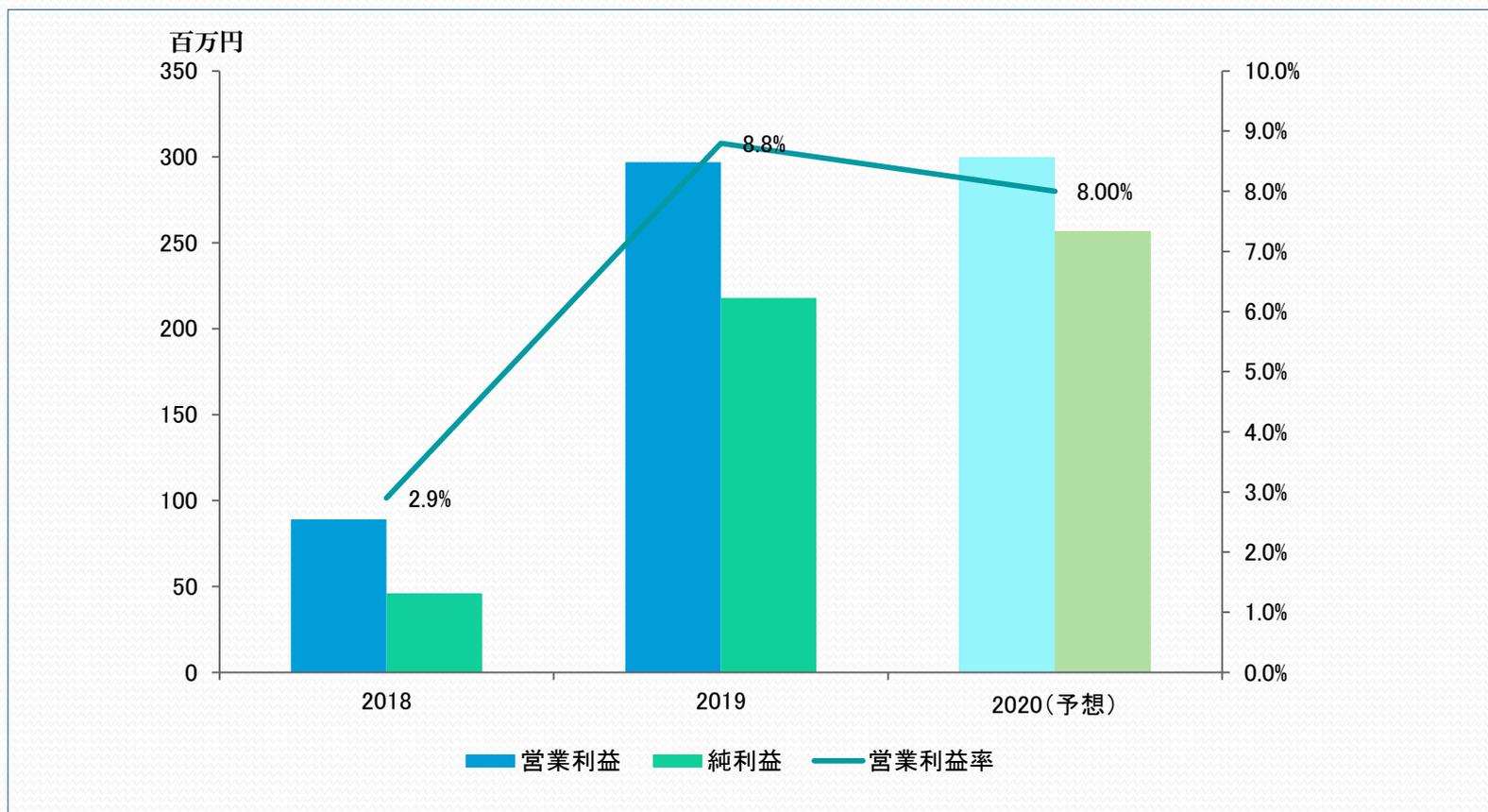
- ◆2020年3月期の売上高も前期比110%へと増収見込み
- ◆営業利益は微増、経常利益、純利益は減少の見込み

2020年3月期の業績予想(売上高)②



◆次期も顧客の設備投資の拡大に貢献すべく、積極的営業活動により増収の見込

2020年3月期の業績予想(収益)③



◆次期も前年並みの利益を確保

◆今後も原価低減活動等により、さらなる効率化に一層注力

今後の戦略

全体戦略	<ul style="list-style-type: none">◆顧客第一主義◆社内設備のさらなる充実◆高付加価値製品の開発◆生産技術立社を目指す
工作機械事業	<ul style="list-style-type: none">◆500種類以上のユニットと専門技術を駆使した提案型営業の強化◆専用加工機メーカーから精機メーカーへ◆メンテナンスビジネスの強化
自動二輪車等部品事業	<ul style="list-style-type: none">◆バイク以外の量産部品販売の強化
グローバル戦略	<ul style="list-style-type: none">◆ベトナムの現地法人を拠点としたアジア展開の強化
今後の投資方針 資本政策	<ul style="list-style-type: none">◆継続的なROE・ROAの改善を目指す◆継続的・安定的な配当を目指す



(4) 社会的課題に挑む 多角化事業

社会的課題に挑む多角化事業

①マイクロバブル事業～微細な気泡で水質浄化

	具体的事業内容
<p>◆マイクロバブル事業とは</p> <p>発生時において気泡径がごく微細な気泡を活用する事業</p> <p>◆活用範囲</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水質浄化 ・水産養殖 ・部品洗浄 ・飲料水加工 ・医療 など 	<p>■マイクロバブル発生装置</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発生装置に高圧ポンプから圧力水を送液することにより気体を自吸、内部液体流速の速度差を利用した「せん断効果」と、特殊壁への「衝突効果」のダブル効果によりマイクロバブルを発生させる装置 ・原料は、現場の水と空気のみ ・特長1: 通常気泡より3倍以上の期待溶解性を有し、短時間で気体溶存濃度を飽和状態にできるため、間欠運転等で利用することによりシステムの省エネ化が可能 特徴2: マイクロバブルの粒径分布は大きく変化するため、液体の性質が変わっても10μm以下の気泡が大量に発生 <p>■マイクロバブル技術の拡大</p> <ul style="list-style-type: none"> ・潜在的な可能性が注目され、全国の研究機関をはじめ民間企業も積極的に研究に参加。用途に応じて新開発と進化が進行中 <p>■マイクロバブル技術による浜名湖浄化実験</p> <ul style="list-style-type: none"> ・浜名湖におけるカキ養殖に適用し、その水域の水質浄化と養殖カキの成長促進を実験 ・養殖カキの成長観察による水質浄化を検証。マイクロバブルを供給したカキは、非供給のカキと比べて、9カ月間で1.5倍の大きさに成長 <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: flex-end;"> <div style="text-align: center;">  <p>マイクロバブル非供給カキ 2004年3月</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>マイクロバブル供給カキ 2004年3月</p> </div> </div>

社会的課題に挑む多角化事業

②ハイブリッド発電システム～小型再生可能エネルギー

具体的システム内容

◆ハイブリッド発電システムとは

風力発電と太陽光発電を組み合わせた小型発電システム

◆活用範囲

- ・公園などの照明灯
- ・防犯カメラなどを用いた防犯灯
- ・災害時などの非常用電源
- ・学校など教育施設用教材
- ・商用電源のない場所での独立電源
- ・環境保全啓発用モニュメント 他

■羽が短く安全で静かな駆動部にも関わらず強力な発電能力

- ・風車の翼(ブレード)をあえて短くし、危険なイメージを払拭
- ・小さくてかわいらしい外観からは想像しがたい強力な発電能力
- ・風速2m/s以下の微風でも翼の回転を開始し、強風時でも静かな回転音

■金魚の目の点滅が防犯効果を発揮

- ・周囲が暗くなると支柱上部の金魚の目がフラッシングし、夜間の防犯効果を発揮

■親しみやすい金魚型モニュメント

- ・街頭にも馴染みやすい親しみのあるデザインを目指し、愛嬌のある金魚がモチーフ
- ・時計・夜間照明システム(オプション)を組み合わせることにより、街のモニュメントとしての利用も可能

